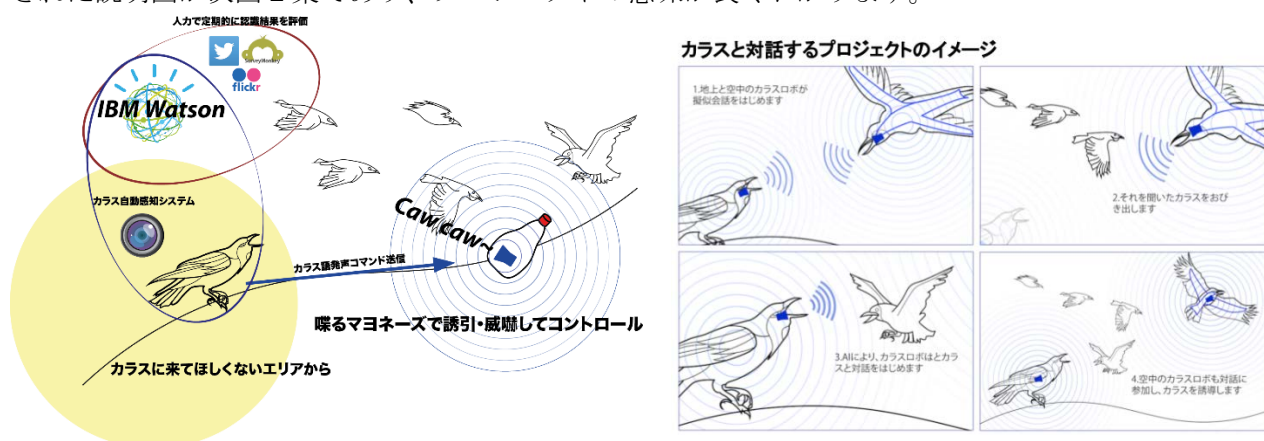


2017 皐月の夢「人工知能(AI)とカラス音声言語」

人間の音声言語を他国の言語へ翻訳する作業は、IBM Watson などのAIプラットフォームを活用すれば、比較的容易にできるようになりつつあり、将に現在進行形であります。一方、カラスとの対話を目指し、カラスの音声言語をユニークな手法で収集し、体系化に取り組んでいる研究者を読売新聞(2017.5.2,夕刊)で発見しました。総合研究大学院大学 学融合推進センター助教 塚原直樹さん(カラス、野生動物、解剖学)と National University of Singapore IDMI Research Fellow 末田航さん(ヨットのIoT化、しゃべるドローン開発)のお二人です。塚原さんは、個人 Web サイトで「総研大の異分野連携型研究をサポートする業務を行いつつ、カラス研究を続けております。できるだけ実社会に役立つ応用研究を、というスタンスで研究活動を行っておりますが、なかなか社会還元できておりません・・・。」と吐露されていますが、「カラス忌避装置」を2007.12に発明され、カラスとの対話手法を確立して更に社会貢献したいとお考えです。末田さんは、「ITメディアを使ったコミュニケーションの研究」、「初心者には難しいヨットの帆の操作を簡単に行うためのシステム開発」を手掛けた経歴があり、総研大を2015.1に訪問して塚原さんとの「鳥の行動制御、観察に関する共同研究」が始まったそうです。

2016.11.21、お二人は「カラスを騙し対話するプロジェクト：カラスマヨネーズ～マヨネーズ型カラス対話IoTデバイス～、カラスの大好きマヨネーズ型スピーカーから発する鳴き声でカラスを騙し対話する」を Mashup Awards にエントリーし、CIVICTECH 部門決勝に選出されています。その時に使用された説明図が次図2葉であり、プロジェクトの意味が良くわかります。



Wikipedia には、カラスは昔から知能の高い動物として知られており、イソップ寓話には、瓶の中で水に浮く餌を取り出すために石を沈めて水位を上げる『カラスと水差し』という話が伝承されているなど、霊長類に匹敵する問題解決能力や観察力を有している、と記されています。カラスは、色が黒くて気味が悪いとか、大集合すると喧騒で糞害が絶えないとか、また、繁殖・営巣期の威嚇・攻撃行動が怖いとか言われますが、警察犬や番犬に似た能力も持ち合わせているということです。その能力を制御することができるかどうかは、カラスと対話することが可能かどうかにかかっています。

古来、動物と話すことができるという能力は超能力でした。人工知能(AI)の力を借りて、それが可能となる時代が将に到来しようとしているのかもしれませんが、それにしても、人間同士のコミュニケーション、国と国同士のコミュニケーション、これらの問題を解決できるAIはいつ現れるのでしょうか？

(文責 アーキジオ春秋)